

妖魔に肉体をぐちやぐちやに された女退魔師

……鈴奈は、決して慢心などしていなかった。

遠奥村に封印された妖魔の話は、一族に古くから伝えられており、通常の魔のモノでは考えられないほど強大だとされてきた。ゆえに、遠奥村に潜み棲む妖魔と対峙した時、彼女は細心の注意と、最大の警戒を払って戦いを挑んだわけだが、その結果はあまりにも無惨なものであったと言わざるを得なかった。

「がはっ、はぁ、はぁ、ぐぐうう……」

鈴奈は、妖魔によって一方的に叩きのめされ、打ちのめされて、見るも無残な状態で捕らえられてしまっていた。愛刀である退魔刀は根元からへし折られてしまっており、身につけている着物は半ば破れて片方の乳房が完全に露出していて、腕や足だけでなく、顔や露出している乳房にも無数のアザや傷が刻まれていた。綺麗な薄桃色の乳首からは、赤い血がまるで母乳のように滴り落ちていたが、それに気を向ける余裕はいまの彼女には存在していなかった。

妖魔との戦いに敗れた彼女は現在、妖魔が棲み処としている山奥にある洞窟に連れて行かれて、妖魔の身体から生えている触手で四肢を拘束された状態で、まるで一種の観賞物のように取り扱われていた。すなわち、苦しんでいる様子を、四方から舐めまわされるように眺め見られているのだった。

「ぐふふふ……いいさま、いいさま……ふふぐふふ……」

「ぐうっ……はあ、はあ、こ、この……化け物め……っ！」
自分の無様な醜態を観察する妖魔に対し、鈴奈はキツと鋭い視線を向けたが、できた抵抗はそれだけであった。

身体に力が入らず、指の一本を動かすことも億劫だ。それだけ手ひどくやられたわけだが、身体が動かない理由はそれだけではなかった。

恐怖だ。

いま、自分を捕らえ、翱翔うとしている妖魔は、見るも恐ろしい姿形をしていた。原型こそ人の形を保っているものの、顔には爛々と輝く赤い目が左右バラバラに五個もあり、縦に裂けた大きな口には無数の鋭い牙がびしっしりと不規則に生え揃っていて、肩からは太く逞しい腕が四本、足も同様に四本、背中からは先端の形状が異なる無数の触手が数えきれないほど生えている。そして、その身長は、巨人を彷彿とさせるほどの巨躯で、軽く見積もっても一〇メートル以上はあると思われた。そしてその強さたるや、鈴奈がこれまで葬ってきた魔のモノとは比較にならぬほど強大で、彼女が手も足もでないほど圧倒的だった。そう、それこそ、とても妖魔のような矮小な存在とは思えず、もつとなにか別のモノのようであった。

そんなモノが、いま、自分を捕らえて、目の前にいるのだ。鈴奈が恐怖で身体が動かなくなったのも無理はなかった。

「く、くううう……」

それでも、彼女は気丈にも、魔のモノには負けないと、自分を邪悪な瞳で見つめる妖魔に対して、鋭い視線を向けると同時に、強い言葉を浴びせかけた。

「こ、この化け物……っ、わ、わたしをつ、早く離しなさい……ッ！」

しかし、その言葉を聞いても、妖魔はニタニタとおぞましい薄笑いを浮かべるだけで、彼女を様々な方向から見つめるのを止めようとはしなかった。そう、まるでこれから獲物をいたぶろうとする猛獣のように。そして、しばらく観察を続けた後、妖魔は醜悪な口臭と共に、邪悪な言葉を吐き出したのであった。

「あ、ああ……おまえのにおい、おぼえがある……われをふうじたにくきおとこのにおいがする……ああ、ああ……ゆるさない……ゆるさない……」

「……ツツツ！」

それは、背筋が凍りつくようなゾツとする声だった。

その声は、なおも続いた。

「ああ、ああ……めいやくをむすんでおいて、やぶったあいつを……われはにくむ……ゆえに、おまえはぜったいに、ゆるさない……いかさず、ころさず、えいきゆうに、えいごうに、いたぶりつづけてやる……ぐちゃぐちゃにしてやる……」

その直後だった。

ブスッ！

「がはッ！」

突然、妖魔の背中から生えている触手の一本が素早く動いたかと思うと、針状になっている先端が、鈴奈の首筋に突き刺さったのだ。そして、激痛を伴う液体の注入がはじまった。

ドグッ、ドグッ、ドグッ、ドグッ……

「ぐがああああああッ、がッ、あががあがああああああああああああッ……ッ！」

鈴奈の口から恐ろしい呻き声が漏れ響いた。針状の部位が突き刺さった首筋が、血管が浮き上がる形で盛り上がっており、そこから注

